

新しい天皇陛下がご即位され、「令和」の時代がスタートした。

「平成」を振り返る報道番組で、よく耳にしたのは「戦争のない時代」というキーワードだ。平然とかく言う人たちは、「自身がどう感じたか」を優先して「他人はどう感じるのか？」には気持ちは及ばない。

平成はまさに湾岸戦争で幕を開けている。コソボ、ダルフル、ルワンダの大虐殺は、広島・長崎をも凌駕する人類史上忌まわしき汚点だ。

アラブの春は、地域の均衡を崩壊させ、新しい戦争の種をまいた。それがもたらした混沌は、欧米を始め今やアジアにまで浸潤しつつある。

イラク戦争に至っては、日本は当事者そのものだ。積極的に加担していながら、「それはアメリカの仕業だ」とほとんどの日本人が思っている。だが、スマホひとつでいつでも情報を入手できる平成の時代、そんな言い訳は通用しない。

昭和の時代、日本は国際社会から孤立し、帝国としての経済規模を維持することが厳しくなった。そして、どう見ても勝てるわけがない大国と戦争をせざるを得ない状況に追い込まれていく。国民の多くが、日清・日露という大国相手の勝利を引きずっていたのかもしれない。テクノロジの進歩や情勢の変化に対応するスピードが備わっていなかった。

令和の時代は、どうだろう？昭和の戦争を70年以上も引きずり、国際社会の変化に

共感の時代 —変化への適応—

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

適応できていないことは、基準は違えど当時と変わっていない。

今や無人機が飛び交い、サイバー戦争は日々常在する。宇宙開発も戦争目的そのものだ。戦争の質が全く変わっているのに、日本人の戦争は、昭和20年で止まっている。変化の内容を知らずして、それに適応できるはずもない。

痛いほど身に染みているはずの資源保全の長期戦略すら場当たりの悠長だ。平和は感傷的に願って叶うものではない。必死の準備と努力を重ねて、戦争の種を潰していく不断の国家戦略が必要なのだ。

自分自身の周りは平和だ。そして自由で便利だ。だが、それを可能にしている国家の庇護の有難さを共感できているだろうか？

今も紛争の絶えない地域で、日々命と向き合う日々を過ごしている人たちの哀れや傷みを共感できているだろうか？

民族の絆や、生き残るための必死の努力を学んでいるだろうか？われわれの先人は、勤勉という宝を残してくれた。幸運にも周囲を海に囲まれ守られている。国際社会の荒波を身に染みて感じている国民はごく少数だろう。

だからこそ、漫然と平和を享受するのではなく、脅威や不安、絶望や落胆に共感し、失敗に学ぶ姿勢を忘れてはならない。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中